様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０６１５

研究課題名（和文）異文化間理解のための映像作品の文化的要素に関する理論的・実証的研究

研究課題名（英文）A Theoretical and Empirical Study on Cultural Elements in Video Content for Intercultural Understanding

研究代表者
保坂　敏子（HOSAKA, Toshiko）

日本大学・大学院総合社会情報研究科・教授

研究者番号：００４０９１３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、異文化間理解や相互理解が日本語教育の主要な目的だと考える立場から、言語と文化が融合した言語文化教育に資するために、日本の映画やTVドラマなどの映像作品の中に意識的・無意識的に埋め込まれた文化的要素について理論的・実証的に明らかにすることである。
まず、異文化間コミュニケーション研究と翻訳研究の枠組みを用いて、映像作品から読み取れる文化的要素について調査を行った。次に、映像作品の文化的要素「日本文化なるもの」に対する国内外の教師や学習者の認識を分析の枠組みを用いないで調査した。その結果、映像作品の文化的要素は人々の認識により多様な側面を持つことが理論的にも実証的にも検証できた。

研究成果の概要（英文）：　This study aims to theoretically and empirically elucidate the cultural elements that are consciously and unconsciously embedded in Japanese movies, TV dramas, and other video content. It thereby aims to contribute to linguacultural teaching, which blends language and culture, from the standpoint that intercultural and mutual understanding are the principal goals of Japanese-language teaching.
First, I examined what cultural elements can be identified in video content using frameworks taken from intercultural communication and translation studies. Next, I examined the perceptions of teachers and learners in Japan and abroad on “the components of Japanese culture,” that is, the cultural elements in video content, without using an analytical framework. The analysis theoretically and empirically verified that cultural elements include diverse aspects depending on people’s perceptions.

研究分野：メディアを使った言語文化教育・日本語教育

キーワード：映像作品　文化的要素　文化認識　相互理解　異文化間コミュニケーション　翻訳研究　文化翻訳　言語文化教育

## １．研究開始当初の背景

社会のグローバル化が進んで異文化間理解や相互理解の重要性が増す中、言語教育における文化の学びが重視されるようになった。ヨーロッパの「CEFR：Common European Framework of Reference for Languages」やアメリカの「21 世紀外国語学習スタンダーズ」など超国家・国家レベルの言語教育政策においても文化が学習内容の一つとして位置づけられている。しかし、授業における「文化」の扱いは、文化知識の紹介や相違点に焦点を当てる場合が多く、「国」を単位とした文化比較を通して静的・固定的な文化イメージを植え付けることが多いと言われている(細川 2006 他)。一方、日本のポップカルチャーは国境を越えて親しまれ、日本語学習のきっかけや動機づけになっている。この中で、映画や TV ドラマ、アニメなどの映像作品は、言語的、視覚的、聴覚的、身体的、空間的意味やその複合様相的意味など多層的な意味を伝える表現体であり、言語と文化の学習における真正性の高い学習リソースとして期待できる。日本国内外で映像作品を利用した授業の実践や書籍の出版が見られる(吉村・宮副 2009 他)。しかし、その多くは、「何を文化と捉えるのか」についての検討をせず、文化的知識を散発的・恣意的に採り上げているものが多い。また、文化の扱いが表面的で固定的なこと、日本とその他の国の二項対立的な扱いが多く、ステレオタイプを助長する可能性があるという問題点が感じられた。このような映像作品を使った言語教育における文化の扱い方・捉え方に問題意識を持ち、本研究を着想するに至った。

## ２．研究の目的

本研究は、異文化間理解や相互理解が日本語教育の主要な目的だと考える立場から、言語と文化を融合した言語文化教育に資するために、日本の映画やドラマなどの映像作品に意識的・無意識的に埋め込まれた文化的要素について理論的・実証的に明らかにすることを目的とする。具体的には、以下の 2 つの研究課題に取り組んだ。

(1) 異文化間理解教育に関わる研究分野の枠組みを基に、映像作品の文化的要素を可視化する。（理論的検証）
(2) 映像作品の文化的要素に対する教師と学習者の文化認識を明らかにする。（実証的検証）

## ３．研究の方法

本研究では、まず、理論的検証のための分析の枠組みと、分析対象とする作品を決定し、調査を進めた。分析の枠組みとしては、異文化間コミュニケーションの文化モデルの「”Big C culture”と“ Small/Little c ”culture」、ならびに、翻訳研究・トランスレーションスタディ分野の「翻訳不可能性」、「字幕翻訳ストラテジー」を取り上げることとした。また、分析の対象とする映像作品は映画『ステキな金縛り』（三谷幸喜監督 2011）を中心的に扱うことにした。これを踏まえ、以下のとおり調査を進めた。

(1) “Big C“ culture と“ Small/Little c ”culture を枠組みに、『ステキな金縛り』の「日本文化なるもの」の認識について調査を行い、文化的要素を検証した。（平成 26～27 年度）

(2) 翻訳不可能性を枠組みに、『ステキな金縛り』のセリフにおける翻訳しにくい要素に関する認識の調査を行い、文化的要素を検証した。（平成 26～29 年度）

(3) 「字幕翻訳ストラテジー」を枠組みに、映画『踊る大捜査線 THE MOVIE』（本広克行監督 1998 ）のセリフの英語字幕を対象に「削除」「言い換え」のストラテジーにより失われた文化的要素を分析し検討した。（平成 26～27 年度）

(4) 文化モデルの枠組みを用いずに、『ステキな金縛り』の「日本文化なるもの」について調査を行い、文化的要素を検証した。（平成 27～28 年度）

(5) 文化モデルの枠組みを用いずに、映画『ビリギャル』（土井裕泰監督 2015）から読み取れる日本文化と自文化との相違点や類似点に関する自己と他者の認識について、教育実践を通した調査を行い、文化的要素を検証した。（平成 27～28 年度）

(1)～(3)は分析の理論的枠組みを用いた調査で、(4)(5)は理論的枠組みを用いない探索的な調査である。この研究に関連する研究としては、この他、翻訳研究・トランスレーションスタディ分野の「文化翻訳」の観点から、TV ドラマ『半沢直樹』（2013 TBS）の香港と中国における受容の調査（平成 26～27 年度）、並びに、『東京物語』（小津安二郎監督 1953）とリメイク版 TV ドラマ（フジテレビ 2002）の社会文化的要素の比較検証（平成 28 年度）を行った。また、アメリカの「21 世紀外国語学習スタンダーズ」の文化要素の分類枠やネウストプニー（1982）が定義した社会文化行動の観点から日本語教科書の分析調査（平成 26～27 年度）も行った。さらに、映像作品を利用する際に必要な教師の著作権に対する認識についても調査（平成 28 年度）を行った。

## ４．研究成果

本研究の主な成果として、研究の方法に記した(1)～(5)の結果について述べる。

(1) “Big C”と“Small/Little c”による調査結果

本調査は、国内の非母語話者(NNS)の日本

語学習者と日本語母語話者(NS)の教師を対象に実施した。学習者は日本国内の大学で日本語と日本文化を学ぶ交換留学生４名（台湾、トルコ、ドイツ、香港）で、全員上級レベルで、日本の滞在歴が約半年の者であった。NS は大学で英語を教え、翻訳の仕事もしている教員１名で、NNS の特徴を顕在化させるために調査を実施した。調査では、協力者に映画を見ながら「日本文化的」と感じたことをリストアップし、“Big C” と“Small/Little c”に分類するよう依頼した。“Big C” と“Small/Little c”の分類については事前導入を行った。

分析の結果、NNS は全体的に“Small/Little c”より“Big C” を文化として認識するという傾向が共通して見られた。社会的な文化背景が異なる人にとって、見えにくい文化である“Small/Little c”の側面を「日本文化」として認識することは難しいことがうかがえる。また、NNS が取り上げた項目が NS のものと一致することは少なく、NNS 同士でも共通して取り上げる項目は少なかった。さらに、共通して取り上げられた文化項目についても”Big C”と“Small/Little c”のラベルが一致することは少なかった。これらのことから、NNS の日本文化に対する認識は多様であり、何を日本の文化的な要素と認識かは、国・地域といった社会的な要因ではなく、個人的な要因による傾向が強いこと、また、各自が認識した文化項目を理論的な枠組みで分類することは非常に難しいことが分かった。この結果を論文にまとめ、文化認識の多様性を活かした異文化間対話の授業デザインについて提案を行った。

⑵ 翻訳不可能性の枠組みによる調査結果

本調査には、日本国内 8 名、ベルギー11 名、スペイン 10 名、アメリカ 2 名、ウクライナ 5 名の 32 名の協力者が得られた。ベルギーの 1 名を除き、すべて NNS である。

調査では、『ステキな金縛り』の日本語の日本語のシナリオで母語に（NS の場合は別の言語に）翻訳しにくいと思った部分を探し出し、以下の 5 つのうち翻訳しにくい理由として適当なものをそれぞれ選んで記述するよう依頼した。

A：この言葉、表現は母語にない。（直訳できない）
　例）＜自己紹介で＞どうぞよろしく。
B：この言葉はあるが、このような場面で使わない／このように使わない。（直訳すると意味が変わる）
　例）＜病院で医者に＞　先生、のどが痛いんです。
C：こんな行動はしない。
　例）授業中にトイレに行くとき、先生に許可を求める。
D：こんな物はない。
　例）歌舞伎、すもう
E：その他（　　理由　　）

分析の結果、翻訳しにくい理由は A、B、D、C の順番で多かった。それぞれ取り上げられた具体的な言葉や表現を分類すると、表１の通りとなる。E のその他には表のような項目が挙げられていたが、複数の人が取り上げたものは少なかった。

表１　翻訳しにくい理由と該当意する内容

| | |
|---|---|
| A | 挨拶の表現、慣用表現、終助詞、呼称、口語表現、武士言葉（役割語）、補助動詞、省略、言いさし、方言、オノマトペ、フィラー |
| B | 呼称（先生など）、感嘆詞、慣用表現、口頭表現、挨拶表現、オノマトペ、間接的依頼表現、副詞、固有名詞、文末表現 |
| C | 正座、呼びかけ、掛け声、お詫び |
| D | 落ち武者、まげ、座布団、ふすま、麻婆豆腐、など歴史的な事物、日常生活品 |
| E | 敬語、省略、相槌、縮約形、制度 |

全体的に見て、等価物のない言葉や行動が多いのは当然のことで、注目すべきは、コミュニケーション上の含意や言外の意味を翻訳が難しいと感じる文化的要素として多く挙げていることである。

また、日本国内と海外の調査結果を比較すると、海外の NNS は、社会言語的な要素についての気づきが少なく、海外の NNS にとってはこれが学ぶべき文化的要素だといえる。以上の結果を論文にまとめて公開した。

⑶ 字幕翻訳ストラテジーの枠組みによる調査

本調査では、映画『踊る大捜査線 THE MOVIE』の英語字幕を対象に、「削除」「言い換え」のストラテジーによって日本語のセリフから失われた社会文化的要素について検討した。

分析は、日本語 NS の 2 名で行った。まず、英語字幕で削除された言語的要素をそれぞれ分析し、2 名の見解が一致したところを翻訳で失われた部分と認定し、Baker(2011)の５つの等価の枠組みを援用した 5 つのカテゴリー（語レベル、文法レベル、文体レベル、談話レベル、語用論レベル）に分類した。その上で、言語的要素の喪失により失われた社会・文化的要素を検証した。

分析の結果、語レベルから談話、語用論レベルの各段階で削除される言語的要素が明らかになった。失われた情報は、話の流れやあらすじに直接かかわるものは少なく、ストーリーの大筋の理解には問題のない範囲であった。一方、コミュニケーションを円滑にし、人間関係の推測を助ける呼称や自己表現に必要な感情表現、話に面白さをもたらす冗談などの言語的要素は高い割合で失われていることが分かった。つまり、字幕翻訳の際に、人間関係をつなぐためのコミュニケーションに関わる言語的要素が削除されるということである。その結果失われた社会・文

化的要素としては、映画の設定である警察や官僚組織に関する情報やその背景にある学歴社会や出世などに関する考え方や価値観が挙げられた。また、呼称が示す人間関係、犯人の家族関係、少年法とその報道の仕方など、映画の設定に関わる社会・文化的な要素が失われていることが分かった。この結果を論文にまとめ、字幕翻訳を使って自律的に映画に親しみ、言葉を勉強する使う学習者が一人では学べない側面として考察を行い、授業デザインの提案を行った。

⑷ 文化モデルの枠組みを用いない「日本文化」の認識調査

本調査は、上述⑴⑵の調査と同時に実施した。対象者は、日本国内外の日本語学習者と日本語教師で、本調査へは、日本国内 16 名、ベルギー11 名、スペイン 10 名、アメリカ 11 名、ウクライナ 18 名の合計 66 名の協力者が得られた。内訳は、NS が 4 名（日本語教師 3 名、英語教師・翻訳家 1 名），NNS が 61 名（教師 19 名と学習者 42 人）の合計 65 名である。

調査協力者には，個別に映画を視聴しながら「日本的（○）」「日本的でない（×）」と思った点について時系列にコメントを記述し，リスト化する作業を依頼した。65 名から 2561 件のコメントが得られた。

収集したデータは，まず，リスト化されたコメントにラベルを付け，それを大きく「空間（場所・products 中心）」と「人物（個人的なもの・practice 中心）」に分け，次に，場所毎，人物毎に下位ラベルを付けて分類を行った。さらに，同じラベルのついた項目の中で，「日本的である」「日本的でない」で意見が一致しているものと一致していないものについて検討を行った。

分析作業の過程で、コメントの量が多く、内容も多岐にわたることから、より詳細で精密な分析ができるようにするために、分析用のデータベースを作成した。また、申請当初は、研究目的の⑵のとおり、教師と学習者にデータを分けて文化認識の違いを比較することを想定していたが、分析に取り組む中で、それぞれの文化認識には、ひとつの属性だけでなく、母語や職業、調査地，来日経験など様々な要因が複雑に絡み合っていることが浮かび上がってきた。そこで、教師と学習者に分けて違いを分析するのではなく、文化認識の全体的な共通点と相違点を掴み、その上で、その認識にそれぞれどの要因がかかわるかを検証する方が重要だと判断し、上述とおりの分析の方向性を変えた。

分析の結果、空間（場所・products 中心）の範疇で「日本的」で認識が一致したのは日本建築の「旅館」「歴史家の家」，また，「日本的ではない」で一致したのは洋館の「犯人の家」で、具体的には、「建築・住宅様式」「インテリア」「生活用品」など目に見えやすいものが取り上げられていた。認識の違いが見られたのは，「ファミレス」と「エミの家（マンション）」である。具体的に挙げられた項目を見ると、「ファミレス」ではメニューの種類の多さや水のサービスが，また，「エミの家」では亡くなった家族の写真を飾ることなど，目に見えにくい文化的要素も読み取っていることがうかがえた。この２つの空間では，それぞれ「日本的」が付いた項目と「日本的でない」が付いた項目が混在していたが，それだけでなく同じ項目が「日本的」と「日本的ではない」に分かれているものも散見された。例えば，「ファミレス」のウェイトレスの制服は，「メイド服」として見た場合に「日本的」だと捉えるが，洋式のウェイトレスの服を起源としたものと考えた場合は「日本的ではない」と判定していた。

人物（個人的なもの・practice 中心）で「日本的」との認識が高かったのは、「落ち武者」「陰陽師」「旅館の女将」で、それ以外の人物は「日本的」と「日本的ではない」の意見が分かれた。特に主人公の「エミ」にはコメントが多く集まった。「日本的」とされたのは、「正座」「挨拶」「お辞儀」など行動的側面であったが、「日本的ではない」とされたのは、はエミの女性としての側面であった。例えば、弁護士であるエミが家計を支え、役者であるパートナーが家事をしていることから「女性が家計を支える」様子を「日本的ではない」と指摘していた。

今回の分析で、同じ事象についても解釈が異なる場合が散見されたが、ファミレスの制服のように、オリジナルが翻案によりローカライゼーションで再生産されたものが、その国の文化として認識されるに至ることが確認できた。これは、文化は「文化翻訳」を繰り返す、異文化混淆性を持つものであることを示唆するものであり、この点が文化認識の多様性の源にあると考えられる。この結果をまとめて、口頭発表を行い、ことばや文化の翻案やローカリゼーションの事例に基づく言語文化教育について提案した。

⑸ 文化モデルの枠組みを用いない教育実践を通した「日本文化」の認識調査

本調査では、映画『ビリギャル』を教材に、作品から読み取れる日本文化と自文化との相違点や類似点について、協働学習により自己と他者の認識を再確認するワークショップを行い、文化認識の様相を調査した。実施場所は、韓国、仁川大学で、対象者は日本語教師養成学科で学ぶ１年生～３年生の学生 30 名（内シート提出者 19 名）で、ひらがなを学んだばかりの人から N1 取得者まで含まれていた。

ワークショップでは、①事前作業として視聴経験の確認、タイトル予測、タスクシートの説明を行い、次に、②映画を部分的に視聴しながら個人でタスク（韓国／自分との類似点と相違点を書く）に取り組み、③クラス全

体で再視聴とタスクの答えの確認をした上で、④３～４人のグループに分かれて、各自の回答の確認と、その他考えられることについて話し合う、という手順で進めた。

その結果、日本文化との違いは、自文化単位での社会的な比較においては、同じ項目が類似点や相違点として挙げられることは少なく、同じ項目が類似点と相違点に分かれることがあることが分かった。また、自分自身との個人単位の比較では、類似点と相違点の両者とも半数ぐらいが同じ項目を挙げること、さらに、グループの話し合いによって新たな解釈が生まれることを顕在化することができた。この教育実践により、学習者は、自己の認識をもとに、主体的に多様な解釈を行い、他者との協働で新たな認識を形成する「文化翻訳者」であることを示唆することができた。この結果は口頭発表で報告し、文化解釈の違いを生かした授業の提案を行った。

以上の一連の研究の結果、異文化間コミュニケーションと翻訳研究の理論的枠組みを用いた調査により、映像作品の文化的要素の一端を可視化することができ、学習者が一人では学べない文化的要素も明らかにすることができた。ただ、一方で、映像作品に埋め込まれた文化的要素やそれに対する文化認識は多様で、多層的であり、分類や体系化は非常に難しいことも分かった。また、分析の枠組みを設けず、探索的にボトムアップで文化要素を抽出する調査から、文化的要素に対する認識は社会的な要因より個人的な要因によって異なる側面が強いこと、さらには、文化は流動的・可変的なもので異種混淆性を持つものであることを実証的に示すことができた。言語教育におけることばと文化の融合を唱える主張では、これまでの教育をクリティカルに捉える言説や、ある個人の変容を検証するものは見られたが、一定の数の背景の異なる人々を対象に、他者と自分の認識の多様性を具体的に明らかにしたものはあまり見受けられなかった。この点で、この研究は新たな知見を提供することができたと考えられる。また、この研究から、言語教育における文化の捉え方として、「文化翻訳」つまり、「文化の翻訳・翻案・変容が文化の普遍的な本質」（松岡 2016）とみなす捉え方が重要であることを示すことができた。今後は、文化のこの捉え方を提示し、言語学習者を「文化翻訳者」とみなした授業展開、教育活動を提案していくことが課題となるだろう。

この考えから、本研究では、映像作品を介した異文化間対話を行うことを目的にしたサイト、J-CINEMA で学ぶ日本語・日本文化（https://www.jp-hiroba.com/）を構築した。このサイトがことばと文化の学びを融合し、異文化間理解や相互理解に貢献することを期待する。

＜引用文献＞

①細川英雄、「社会文化能力」から「文化リテラシー」へ--日本語教育における「文化」とその教育概念をめぐって、リテラシーズ、(2)、2006、129-144、くろしお出版
②吉村弓子・宮副ウォン裕子、日本と香港をつなぐヴァーチャル教室の映画批評交換 - 異文化理解における映画の効果と外国人留学生の役割 - 、北海道言語文化研究、7、2009、29-40
③松岡直美、文化翻訳入門－日本と世界の文化コミュニケーション－講座案内」、2017 https://lms.gacco.org/courses/course-v1:gacco+ga074+2017_01/about（2018.5.1 閲覧）

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①保坂敏子、映像作品における翻訳しにくい日本語－日本語非母語話者の認識に関する調査から－、東アジア日本語教育・日本文化研究、査読有、第 20 号、2018、449-468
②井上健、呉川、古賀太、近藤健史、髙綱博文、ドーシィ・ジョン・T.、松岡直美、保坂敏子、椎名正博、文化翻訳が拓く異文化間コミュニケーション－文学、メディア・アート、パフォーマンスにおける事例研究－、日本大学大学院総合社会情報研究科紀要、査読無、No.18、2018、279-290
③保坂敏子、映画に埋め込まれた文化に対する認識－異なる文化背景の人々は何を「日本文化」と捉えるか－、東アジア日本語教育・日本文化研究、査読有、第 19 号、2016、1-22
④保坂敏子、字幕翻訳で失われる要素－言語教育とのかかわりを考える－、日本語と日本語教育、慶應義塾大学紀要、査読無、44 巻、2016、41-57

〔学会発表〕（計５件）
①保坂敏子・櫻井直子、映像作品に対する文化解釈－文化認識を生かした言語文化教育のための調査－、日本語教育学会、2016 年度日本語教育学会研究集会第 9 回関西地区、2017.3.11、大阪 YMCA 国際専門学校（大阪・日本）
②保坂敏子、映画のシナリオにおける翻訳不可能な要素－異文化間コミュニケーションの問題点を探る－、東アジア日本語教育・日本文化研究学会　2016 年度第 20 回国際学術大会、2016.8.5、ハワイ大学ヒロ校（ハワイ・アメリカ）
③保坂敏子、「文化翻訳者」としての学習者－映像作品の「文化翻訳」の事例から－、異文化間教育学会第 37 回大会、2016.6.5、桜美林大学（東京・日本）
④保坂敏子、映画に埋め込まれた文化に対する認識－学習者は何を「日本文化」と捉え

るか－、東アジア日本語教育・日本文化研究学会、2015 年度第 19 回国際学術大会、2015.8.22、西南学院大学（福岡・日本）
⑤保坂敏子、字幕翻訳から見た映画の文化的要素に関する考察－異文化間重視の日本語教育のために－、東アジア日本語教育・日本文化研究学会　2014 年度第 18 回国際学術大会、2014.8.23、崑山科技大学（台南・台湾）

〔その他〕
ホームページ等
J-CINEMA で学ぶ日本語・日本文化
https://www.jp-hiroba.com/

## ６．研究組織

(1)研究代表者
保坂　敏子（HOSAKA, Toshiko）
日本大学・大学院総合社会情報研究科・教授
研究者番号：00409137

(4)研究協力者
①櫻井　直子（SAKURAI, Naoko）
②鈴木　裕子（SUZUKI, Yuko）
③ウィルソン ブラッドリー（WILSON, Bradley）
④森田　淳子（MORITA, Junko）
⑤小林　亜希子（KOBAYASHI, Akiko）
⑥崔　殷嫇（CHOI, Yeun Heck）
⑦崔　光準（CHOI, Kwan Jun）